

香川小児病院産婦人科・森根幹生医長

香川の医療 最前線

22



生まれてきた赤ちゃんの体に、何らかの異常がある確率は3〜5%とされる。その異常を胎内にいる時から発見し、効果的な治療につなげる機会として広まったのが超音波などによる出生前診断。異常への早期対応が可能になった一方、判明した赤ちゃんの障害などを理由に人工妊娠中絶を選ぶなど、新たな問題も起きているという。香川小児病院の森根幹生産婦人科医長に、出生前診断の現状や課題を聞いた。

技術進む出生前診断

受け入れ体制を整えるのを支える。手法としては、広く言えば古くからの触診なども含むが、現在は超音波

異常早期発見も…中絶要因に

親への精神支援重要

将来的に障害となり得る疾患などが診断されるようになってきた。半面、検査で異常が見つかり、十分な情報を受け入れ体制を整えるのを支える。手法としては、広く言えば古くからの触診なども含むが、現在は超音波

による画像診断、胎児心拍モニター、染色体検査などが用いられている。

— 出生前診断とは。主な目的や方法は何か。

妊婦・出産管理、出生後管理▽胎内治療▽両親への精神的支援—が目的の三つの柱だ。妊娠中の母体管理や出産の様式、時期を適切に選び、効果的な胎内・胎外治療を施すほか、赤ちゃんの状態や疾患などの情報を提供する一方で、親側が

— 倫理上の問題が浮上しているというが、医療技術の進歩により、

— 診断自体に賛否は、

— 診断自体に賛否は、

— 診断自体に賛否は、

■もりね・みきお 1994年徳島大学医学部卒。大阪府立母子保健総合医療センター、徳島大学病院周産母子センターなどを経て2006年から現病院。07年から医長。日本産科婦人科学会専門医。徳島市出身。41歳。

やはり両論ある。「中絶目的」の可能性が生じる診断は特に、慎重さが必要とされる。一方で、親側に異常の有無を知りたいという欲求が高まっているのも事実。倫理観と社会的需要、両者の綱引きの上で医師の考えも問われている。

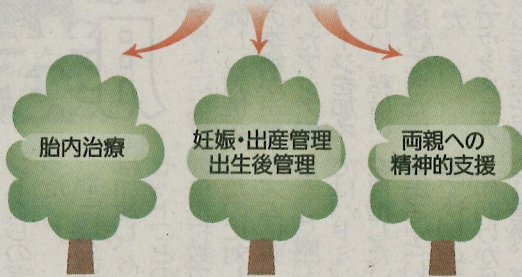
— ほかの課題は、

ヨック、否認、悲しみ、怒りなどの精神状態で出産を迎えることが多い。胎児の存在を尊重した上で、ネガティブな精神状態を適切な情報提供やカウンセリングで軽減し、出産や育児に導くことが重要だ。ただ、それには医師や看護師に加えて、臨床心理士など専門スタッフによるサポートが望まれるが、現在は人材が不足している。人的体制の充実が、小児病院など専門施設にとって急務だろう。

— 香川小児病院の体制は。

産科、新生児、小児を専門とする医師、スタッフがそろった、まねな施設。総合周産期母子医療センターがあり、立地面からも広域医療の可能な条件を満たしている。その専門性を生かすためにも、出生前診断に関する情報も充実した体制づくりを図りたい。

出生前診断の3つの柱



香川小児病院産婦人科

スタッフは現在、医師が常勤と非常勤各4人で、看護職員が外来2人と病棟35人、ほかに事務員1人。不妊診療や思春期女性の外来も開設している。

所在地：善通寺市善通寺町2603

電話：外来0877(62)1778

http://www.hosp.go.jp/~kagawasy/